

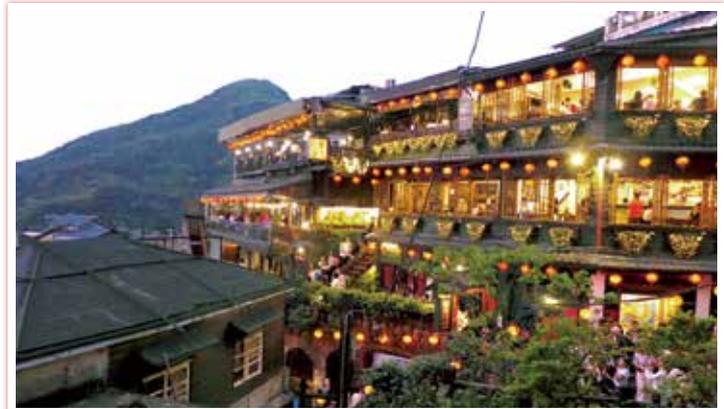
台湾日記

ー台湾でシャッターを切る

外国語学部 中国語学科3年

近藤 琉華

私は2024年の3月6日から約3週間、台湾の首都台北市にある国立台湾大学に語学研修に行ってきました。普段から写真を撮ることが好きな私は、父から譲り受けたカメラとともに台湾の様々な風景を写真に収めてきたので、今回はそのなかでも印象に残った九份、台湾路地、早饭、夜景、大学をご紹介します。



九份老街2024.3.23

海に浮かぶ島々

この街並みにもとても魅力を感じたが、町の隙間から見える遠い海に浮かぶ島々にも感動した。

まるで海と山の二つの地点からサインを送りあっているかのようだった。



九份老街から見える海の島々 2024.3.23

灯で灯る山上の繁華街 九份

最寄り駅からバスで険しい山道を登る事20分、突然ひっそりと現れるこの小さな街はジブリ映画「千と千尋の神隠し」の舞台モデルとしてお馴染みの九份である。商店街の入り口から続く細い道の両脇には数々のお店が立ち並び、人々を引き付けるための売り出しを行っていた。観光客であふれかえるこの道をかき分けて進んだ先によく開けた景色にたどり着く。あまりの美しさに私もカメラを構え、シャッターを切ったが、この街の本番は五時を過ぎたあたりからだった。突然頭上に浮かび上がったいくつものランタンがこの街に華やかさをもたらし、私たちを赤く灯してくれたのだ。この景色を見るために人々は一苦勞二苦勞してまでも、ここに足を運びにくる。

アートチックな台湾路地

台湾の街並みはアート作品のようだ。カフェが集まる街には壁に絵が描かれていたりしているため、それぞれにコンセプトがあるみたいだ。

また日本に比べて街中に路地が多く、路地には四六時中バイクが停留している。バイクが道脇に立ち並ぶ姿は日本では見慣れない光景であるため路地と一体化する姿はとてもユニークである。どの路地のシャッターを切っても1つの作品であるかのようだ。

それから日が暮れ始めると突如道の両端を埋め尽くす屋台の数々。食をそそる香り、人で賑わう様子を見ると思わず引き寄せられてしまう。

色とりどりの看板には1つ1つテーマがあるかのようで個性を表現しているが、1つの画角でシャッターを切るとお祭り感が感じられる。



中山 壁一面に描かれるアート 2024.3.17



中山路地 2024.3.23



寧夏夜市 2024.3.10

山の頂上から見上げる台北101の足元

台北101は街のシンボル。街の中でいかにも存在感のある台湾一の超高層ビル101は実際に展望台に登って台北の夜景を一望することが可能。だが私はどうしても101と一体化する台北の夜景のシャッターを切りたくて近くにある象山に登ったのだ。日が落ちて暗い中ひたすら階段を上りつづけて苦勞した先に広がる台北の景色と101は言葉に表せないほどの感動であった。

思わずシャッターを切らずにはいられないが、カメラには収まり切れないぐらいの美しさは実際に足を運んで自分の目で確かめるべきだ。



象山から見る台北101 2023.3.17



朝から夜まで外食

台湾の食文化は日本と大きく異なる点がある。それは外食文化があることだ。台湾といえば夜市が立ち並ぶ姿を想像できるが、夜に負けないぐらいに朝から各地で朝食を待つ人で賑わっている（早飯）。そのため1日3外食で済ませる人がほとんどで、キッチンを持たない家庭も稀ではない。

早朝から列を作っている現場に私も参列して確かめたが、台湾朝食の安さと優しい味付けは人々の舌を虜にして、パワーを与える理由が分かった。



四海豆浆大王 2024.3.17

台湾大のメインストリート

最後に今回最大の目的である語学勉強を果たした台湾大学。敷地内にある中心の大通りは台湾大学のメインストリートだ。

留学生活最終日の前夜に友人と大学を訪れて敷地内をひたすら散策して語り明かした思い出が浮かび上がる。

台湾大の敷地面積はとても大きく、東京ドーム約4個半の広さである。またこの開放的な敷地は一般の人のランニングコースやお散歩の一環、撮影地や結婚式としても使用されるのだ。なんと言っても正門をくぐり抜けた先の両側にずらっと立ち並ぶ椰子の木の迫力が言葉に表せない。ライトアップされた椰子の木はより一層迫力を増し、同時に私たちに安らぎも与えたのだ。



夜撮影 2024.3.25

台湾国立大学



昼撮影 2024.3.26

今回は私が台湾で特に印象に残った写真のほんの一部をご紹介したが、写真には残せなかった台湾人の温かさや、台湾文化への関心などのエピソードが数知れずある。

私の写真を見てみなさんにもぜひ足を運んで自分の目で確かめてきていただきたい。



左から十份、九份にて父撮影 2024.3.23



父から譲り受けた実際のカメラ (Leica D-LUX6)

普段から仕事でカメラを構えることが多い父の影響を受けて写真撮影に興味を持った私。

父から突然「これから色々な景色をたくさん撮って」と愛用のカメラを受託された。

これ以降どこに行くにしてもこのカメラを手放せなく、何気ない一瞬のシャッターを切る。



今回の留学生活を通して私が見たものの全てを写真に収めることはできなかったが、心の中のアルバムにしまっている。

これからの人生もこのカメラと共に様々な景色のシャッターを切っていこう。